

——二八歳になったときに社会で活躍している女性を育てることをめざす「28 project」という独自のミッションを掲げておられます。なぜ、こうしたミッションができたのでしょうか。

まず一つ、根底にあるのが、大正一四年に当校の前身が「社会で活躍する女性を育てたい」という私の曾祖母の思いから創立され、いまでもその思いを建学の精神として引き継いでいることです。

私自身はもともと都内の私立高校で国語教員を務めていたのですが、当校が生徒数不足で危機的状况にあることを知って、一九八九年に当校に着任し、学校改革に参加しました。すべてにおいて生徒の立場に立って考え直し、校舎の建て替えや私たち教員がデザインした新制服の導入、カリキュラムの変更、新たに採用

## この人に訊く! vol.22

品川女子学院校長

# 漆紫穂子氏

## 社会に貢献する心と自主性を 兼ね備えた女性を育てたい

女性として必要な所作と教養、自主性や積極性が身につくと評判の高い、都内で屈指の人気校・品川女子学院が掲げるミッションが、28歳になったときに社会で活躍している女性を育てる「28project」である。その取り組みを通じた、生徒たちの心に“やる気のスイッチ”を入れる方法を漆紫穂子校長に訊いた。

した教員を企業に研修として一年間派遣するなどしました。

経営が持ち直し、改革が踊り場にさしかかった九〇年代後半に改めて建学の精神に立ち返ろうと、それまでの取り組みを整理する機会を設けたんです。未来を見据えてどういった女性を育てていくかを考えたときに、当校のミッションとして「28project」が定まりました。実際に、それを掲げたのは二〇〇三年です。

### 社会経験を積むことで やる気のスイッチが入る

なぜ、二八歳を軸にしたかといえは、現代の日本で働く女性にとつて、その時期が大きなターニングポイントになるからです。仕事に慣れて活躍の場を広げる一方で、結婚や出産を経験する時期ですから。企業に勤める女性の六割が出産を機に退職すると言われていますが、出産後も働きたいと希望する女性は多いのに、現実はその希望をかなえられる人は少なく、社会全体でとらえれば、女性の労働力が活かされていないんですね。

中高一貫校である当校では、生徒一人ひとりが六年間のうちに様々な社会経験を積み重ねます。社会と自分をよく見つけ、自分自身の得手不得手や適性を知り、それらが自分の思い描く将来像とどうつ

ながるのかを見定める機会を得られる環境を整えるよう心がけています。仕事と家庭を両立できる人生設計を組み立てるのに役立つ専門分野をもてるような取り組みを、意識的にこなしているんです。生徒たちも、いまやるべきことが何かよく理解し、積極的に活動してくれます。

企業とコラボレーションするなど、ユニークな授業を行なわれていますね。

ええ。「28project」に沿った取り組みとして、中等部一年生は学校の周辺を巡って地域について学び発表して、礼法も学びます。二年生は華道、茶道、着付けの授業を通じて日本文化に触れます。

企業コラボには、三年生が取り組んでいます。毎年、一〇二社の企業の方たちにご指導いただきながら、全員がチームを組み、総合学習の授業や昼休み、放課後を活用して商品開発などに携わります。〇六年度に始め、ヤフー・ジャパンやアスクル、サンヨー食品、取り組みの経過が書籍にもなった米菓メーカーの岩塚製菓など、いままでに一〇社近くと連携し、コラボ商品を販売していただいたり、販促やPRなども体験させていただいたりしました。

実際に社会で働く人々と接して仕事を体験することで、人生のロールモデルを見出し、授業科目では評価されにくい自分の能力に気づき、夢をもてるようになる



### うるしほこ

1961年、東京都生まれ。都立日比谷高校、中央大学文学部を卒業後、早稲田大学国語国文学専攻科を修了。都内私立中高一貫校の国語教師を経て、89年、品川女子学院へ。2006年から現職。著書に「女の子が幸せになる子育て」(かんき出版)、「女の子が幸せになる授業」(小学館)。品川女子学院のホームページ内で「校長日記」をほぼ毎日更新。

に行ったりして、そうした意見を参考に必要な機能を取り入れたデッサンを描き、試作品もつくりました。

示された問題の解決に取り組むだけでも素晴らしいと思いますが、問題発見へシフトされたのは、なぜでしょう。

常に未来の社会を見据えてプログラムを考えてつくり、必要とあらばすぐよりよい方向に変えるのが当校のスタンスです。人口減少社会を迎える日本には、必ず女性の労働力が必要になります。組織内で活躍する女性はもちろん、自ら発見した問題を解決するためのソーシヤルビジネスを起す女性も増えるはず。現に

## この人に訊く!

った生徒もいます。心の中にある、やる気のスイッチが入るんですね。

あるCM制作のコラボに取り組んだ生徒は、クリエイターの方から真面目な顔で「くだらないことを次々と思いつく才能がある」と言われたのがきっかけで、自分には人と異なる才能があると思えたそうです。将来、広告業界で働く夢を抱

上/新商品開発に向けて企業担当者や生徒たちで打ち合わせを重ねる 下/「白ばら祭」における模擬店の様子



### 品川女子学院

1925(大正14)年、漆雅子氏により在原女学校設立。卒業生が28歳になったときに社会で活躍していることを目標に「28project」を実践している。中等部3年生が企業と協力して商品開発などを行なう総合学習や、高等部1、2年生が文化祭において株式会社を設立する「起業体験プログラム」など、新しいタイプの教育にも取り組む。企業とコラボレーションした教育実践をまとめた書籍に「新潟のおせんべい屋さん」が東京の女子中学生にヒット商品づくりを頼んだらとんでもないことが起こった!?(かんき出版)がある。

女性の起業は増加傾向にあります。働きやすい環境を自らつくるうえでも、女性のほうが起業に向いていると思います。

当校の卒業生が皆、起業することはないでしょうが、実践の場を用意しておくべきと考え、高等部一、二年生は、文化祭「白ばら祭」において模擬店を株式会社として運営する起業体験プログラムに取り組みます。クラス単位で社長やマネージャー役、会計係などを決め、設立登記に始まり販売から株主総会までの流れを経験するのです。中等部と同様、総合学習の授業などを活用します。

各クラスは自ら立案した事業計画を、当校の卒業生たちが務めるベンチャーキャピタリスト役に対してプレゼンテーションします。その優劣で希望の出資額を得られるかが決まるんです。このプログラムには、VCや税理士など経営や財務に精通した生徒の親御さんたちにアドバイスなどをいただいています。

生徒たちの話し合いに耳をすませていると、「事業性」「損益分岐点」といった経営に関する言葉が聞こえてきます。お客様に喜んでもらうとともに、企業は継続性が大切という意識をもっているのです。ことは、若年層の和菓子離れを解決し、かつ、和の文化を伝えたいと和菓子屋・ふるや古賀音庵さんにプレゼンして、パッケージデザインを手がけた

いて様々なチャレンジをするだけでなく、そのために必要なことを学べる難関大学入学をめざして勉強にも励み、学力がグッと伸びて見事に進学したんです。当校の生徒は、自分が学びたい学部学科にこだわって大学を選び、進学していく傾向が強いですね。

### 起業体験を通じて働くことの意味を理解する

自主性をもつ生徒が育ち、その結果として学力も伸びているのですね。

そう感じています。企業コラボについては今年度から、より主体的に動くことを求めるプログラムに変えたのですが、皆、楽しみながら率先して取り組んでいます。これまでは各企業から頂戴した商品開発などのお題に対する正解を見つける、いわば問題解決型でしたが、問題を発見するところから始めることにしました。「デザイン思考」という手法を用いて、世の中の不便や人々の困っていることを見つけ、最適解を導き出すことをめざしています。

デザイン思考を学ぶ授業では、あるチームがベビーカーにスポットをあて、街中でベビーカーを押すお母さんたちにインタビューしたり、ベビーカー用品メーカーの方たちにアポイントをとって話を聞き

「餅のどら焼き」を販売したクラスがありました。評判を呼んだため、文化祭後、JR品川駅「エキユート」内の同社店舗でも限定販売してくださったんです。とはいえ、生徒たちには相当な負担な

のでは?

おっしゃる通りで、大変だと思います。生徒の九割は部活動にも励んでいるので、日頃の勉強に加えて、起業体験プログラムが重なる大きな負荷がかかりますが、だからこそ、効率よく物事を進める術を磨けます。「任せる勇気を学びました」と言った生徒がいました。当然、失敗もしますし、チーム内でもめ事が起こることもしばしばです。でも、そここそが大切で、「失敗」や「めめ事」を乗り越えることで、あきらめずに粘り強く継続していく姿勢が身につきます。

「28project」を通じて、地域や日本の文化に触れ、事業のつくり方や創業の精神について学ぶことで、生徒たちには、働くことの意味を理解してもらいたいと思っています。名だたる大企業もその発端はソーシヤルビジネスであり、「社会貢献する」という創業者の思いを社員が共有してモチベーションを高め、懸命に仕事に取り組んできたのだと思います。そうした姿勢で社会に貢献しようとする志をもつ生徒を、一人でも多く育てていきたいですね。